

ギャラリー仲摩通信

二〇二一年一、二月合併号

新年のご挨拶が旧正月も過ぎてしまいました。大変遅ればせながら、本年も宜しくお願い申し上げます。



二月十三日、またしても東北地方で大きな地震が発生しました。コロナ禍で大変な折、更なる災害に遭われた皆様に謹んでお見舞い申し上げます。一日も早く復興されるよう祈っています。

本年は、チェコのリベンスキー教授生誕百年、コペツキー教授生誕九十年、TRIART(チェコが民主化して設立されたチェコのアートを扱う民営貿易会社)設立三十周年にあたります。今号から、お二人の教授を始め、印象に残る展覧会や、建築、音楽とガラスアートの関わりなど、エピソードを交えて、開廊から今日までを、来年迎えるギャラリー仲摩四十周年に向けて振り返りながらガラスアートの魅力を綴ってみたいと思います。(仲摩)



ギャラリーナカマ開廊

専門学校卒業後、アパレル企業に勤め、季節や流行で価値が変わってゆく速さについてゆけず転職を考えていたところ、知人の紹介で輸入版画卸売会社に転職し、版画の営業を経験しました。

暫くし、自分の眼で選んだ作品を扱いたい思いが募り、美術商の許可を得て、自宅を事務所に独立しました。

「版画」の講演会に参加し、講師の岡部徳三氏(シルクスクリーン摺師の先駆者、工房と版元を主宰)を訪ねて以降、岡部氏を師と仰ぎ、岡部版画出版の作品を委託販売させて頂いていました。

岡部氏から「女性が始めたばかりのギャラリーを見てきたら。」と奨められ、田園調布のナカマアートギャラリーを訪ねました。



「田園調布展」から

塚本吉廣

ヘンリー・ミラー展開催中の事です。ギャラリーにしばしば何うようになったある日、店主、中島牧子さんから、結婚で継続が難しくなるので、ギャラリーを引き継ぎませんか、というお話を頂きました。突然、ギャラリーオープンが現実になったのでした。

ギャラリー勤務経験無し、お客様無し、作家無し、資金無しの無い無い尽くして無謀にも一九八二年六月、田園調布にギャラリーナカマ(開廊時表記)が誕生しました。その後すぐに経験することになるギャラリー経営の難しさなど、当時は知るよしもありませんでした。

◆開廊企画展「有元利夫」バロック 有元利夫先生の全版画をバロック音楽と共に展示。

開廊企画展 DM



有元利夫「バロック 遊戯の舞臺」

音楽、建築の融合」

◆版画からガラスアートへ

絵画、写真、彫刻、工芸と多岐に渡る作品を扱っているうち、全てが中途半端になるよう専門分野を持ちたいと模索するようになりました。そのような折、友人の紹介で見た佐藤新平さんの個展のヒビ割れた鏡をベースにした作品に衝撃を受けたことがきっかけとなり、ガラスアートを扱うようになりました。倉本陽子ガラスジュエリー展、GLASS OBJECTS、谷川清喜個展、俣野広司個展を開催し、徐々にガラスアートの展覧会が多くなってゆきました。

◆チェコへ渡る

一九八四年、84日本のガラス展(小田急百貨店)会場でダナ・ザメチコヴァーさんの『劇場』という作品に出会いました。ずっと、その作品が脳裏から離れず、

ダナ・ザメチコヴァー

「劇場」1984年



一九八六年秋、ダナさんを訪ね、チェコへ渡りました。グラフィックデザイナーの友人、須藤愛子さんが同行してくれ、トーマスクツク(電車時刻表)片手にヨーロッパ列車の旅は、途中いくつかのハプニングに見舞われながら、ソフィア、ベオグラード、ウィーンを経由し、プラハ駅へ。

社会主義時代のチェコスロバキアは、全てが国の統治下にあり国营アート貿易会社「アートセントラム」が輸出業務を担っていました。担当者のサンドラさんに引率されてダナさんのお宅に到着。ダナさんの作品に感銘を受け、個展開催を懇願したのですが、話題はご主人のマリアン・カレル(ガラス造形作家、その後すぐに、素晴らしい作家だと知りますが)さんの作品へと移行し、話が進みません。 当時は、まだお嬢さんが小さく、家族

と過ごす時間を大切にしたい事、ダナさんはアメリカで大変な人気があり多忙を極めていた事、ヤマハが日本の窓口になっていた事等で個展開催は承諾してもらえませんでした。何とかグループ展の約束を取り付けました。



GLASS OBJECTS II
DM

こうして一九八八年、「グラス オブジェクト」展開催に至りました。

出品作家／伊藤孚、ウラジミール・

コペツキー、ダナ・ザメチニコヴァー、

マリアン・カレル、(敬称略)

◆コペツキー氏の日本の仕事

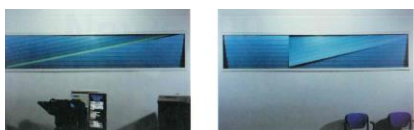
プラハ訪問時は、ダナさんのお宅に泊めて頂き、次第にチェコ訪問の機会が増えてゆきました。

もう、いつだったか覚えていませんが、プラハの路上でいかにも芸術家らしい風貌の強く温かい眼をした男性に出くわしました。ダナさんから「コペツキー、彼も作家。」と聞いて、すぐさまアトリエを訪問しました。

両手にゴミバケツをぶら下げた氏に、予定より早い訪問を詫げると、「いつ来

ても同じだよ。」と恥ずかしそうに笑ったのが印象的でした。

前衛芸術家、コペツキー氏の仕事は造形作品だけでなく、建築空間のための大作に及びます。写真で見た間仕切りを兼ねた積層ガラスにペイントした作品の研ぎ澄まされた感性に思わず背筋がゾクゾクしました。帰国してすぐ、作品があるオランダの保険会社で実物を目にしました。是非とも日本の建築物に氏の作品を納めたい！と奔走する日々を送りました。



念願叶って、一九八九年、チェコ民主化の年に株式会社インプレスのプロデュースでコニカミノルタ ジャパン(株)(旧コニカ(株)) 壁面に幅三・六メートル、縦六〇センチ、二点一對の大作が設置されました。(写真上)

翌年、一九九〇年、コペツキー氏がプラハ美術工芸大学ガラス科主任教授に

就任し

ました。

同年、

麻布美

術工芸

館で、



日本初の氏の個展が開催され、インスタイルション、ガラス造形、エスキースの展示、講演会で建築空間への提案をした展覧会でした。

展覧会オー
ブニング&



満面の笑みのコペツキー氏

氏の誕生日を祝う会がチェコ大使館で催されました。(写真右)

◆一九九二年、富山市庁舎市長室隣接壁面に五十センチメートル角の六点連作の作品が設置されました。(写真上)(建築家・(株)日本設計、浅石優氏)



◆一九九三年、目白坂S Tビル(関口フランスパン) エントランスホールに幅三メートル、高さ二メートルの大作を制作。(写真下)(建築家・(株)野生司環境設計、伊東俊之氏)



◆二〇一〇年、港区「WELLTH 高輪」エントランス正面壁面に幅約七三センチメートル、高さ一〇

センチメートルの作品が設置されました。

(写真下)(設計・

N T T都市開発(株))



一九九一年、横浜美術館アートギャラリーにて「コンテンポラリーグラス」展が開催されました。横浜美術館、黄金崎クリスタルパークガラスミュージアムに氏の出品作が所蔵されました。

展覧会から三十年経過した本年、氏の出品作「Strange Table」(写真右下)



が富山市ガラス美術館に所蔵されました。(仲摩)

編集後記

なぜ、田園調布にギャラリーを開けたか？ 何度か尋ねられましたので、ギャラリー仲摩オーブン前からの話を書かせて頂きました。

今年十一月、九十歳を迎えるコペツキー教授に敬意を表し、今号で氏の日本の仕事をご紹介しました。また、九十歳を超えた氏の仕事を皆様に報告出来るよう願っています。(仲摩)

《編集・発行》ギャラリー仲摩

横浜市緑区三保町二〇六〇番地

TEL:090-1053-6642 FAX:045-507-3080

<http://www.nakama.co.jp>

nakama@nakama.co.jp